

富田林中学校

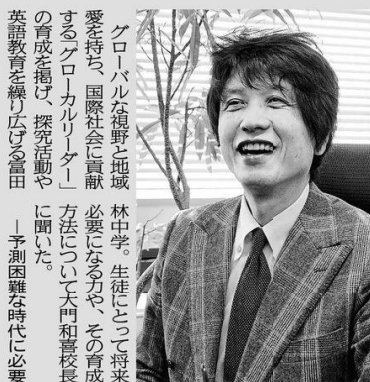
■校長 大門和喜
■創立 2017年(中高一貫校の開校年)
■住所 富田林市谷川町4の30
■生徒数 約360人

次代の力を育む 中学教育

中高一貫校の現場から ⑪

富田林中学校 大門和喜校長

「グローバルリーダー」育てる



生徒らに「国際社会に貢献できる人」になってと呼び掛ける大門校長

グローバルな視野と地域愛を持ち、国際社会に貢献する「グローバルリーダー」の育成を掲げ、探究活動や英語教育を繰り返している富田林中学。生徒にとって将来に必要な力や、その育成方法について大門和喜校長に聞いた。

「予測困難な時代に必要とされている。グローバルな視野と地域愛を持ち、国際社会に貢献する「グローバルリーダー」の育成を掲げている。」



企業の課題解決に向けた提案資料を作成する生徒ら

探究活動で社会課題解決へ 産官学で教育下え

1、2年生で積み重ねてきた探究活動の総決算となる取り組みで、3年の駄馬中和花さん(15)は「発表の際、優先順位を付けて要約を言うようになった」と成長を実感していた。

■「社会の一員」自覚
探究活動は、秋ごろからの授業で週2時間分を充てて全学年で展開。1年生は、分野の違う5つの地元企業・団体から、地域の産業や都市政策などについて学び、班でリポートにまとめて理解を深め、探究方法の基礎を学べる形だ。



修学旅行で訪れた台湾の姉妹校で交流を深める生徒ら

英語力を伸ばそうと始めた。対話の機会を充実させるため、来年度は外国人と一対一で話すオンライン英会話を月1回全学年で導入する予定。

大門和喜校長は「国際理解を深め、世界の課題を解決していくためのツールとして、英語を習得させていければ」と抱負を示す。

ツールとして磨く「英語力」

国際社会に貢献していくためのツールとして重視しているのが、英語力の育成だ。授業以外でも英語に触れる時間を毎日設けつつ、台湾への修学旅行などで学びへの動機付けと実践の場を用意。希望者にはマレーシアでの海外研修の機会も設けたほか、来年度からはオンラインを活用し、さらに体制を充実させる方針だ。

グローバルな視野を持ち、国際社会に貢献する人材を育てるのに英語力は不可欠と考えている。

海外研修やオンライン英会話

1 限目の前には、毎日15分の英語学習時間を設定。英語と接する時間を確保しつつ、3年の台湾の修学旅行に備え、姉妹校の生徒と手紙やメールのやりとりを1年の段階から組み込む。学習意欲を高め、現地で積極的な対話を促すのが狙いだ。

1、2年の希望者には、マレーシアへの海外研修を用意。高度経済成長期で活躍する起業家らの話を聴き、探究活動の深化を促したり、実践的な

150の企業・団体と協働

「薬を作る過程の効率化を進めれば、労働力が高まり、発目標(SDGs)の観点から人材が集まるのではないか。東和薬品が自社の課題と選んで、関心のある分野を「人財不足」を掲げたのに、アイデアを出すための発想法を、解決方法を議論していた。3年生の探究活動では、大手メンバーと意見交換しながら、1月中旬の授業では、班の提案だ。

産官学で教育下え

多くの企業・団体との連携を推進する要となっているのは、学校運営の仕組みだ。同窓会や保護者、地域住民らが一定の権限と責任を持って参加する学校運営協議会がある。

■開かれた仕組み
多くの企業・団体との連携を推進する要となっているのは、学校運営の仕組みだ。同窓会や保護者、地域住民らが一定の権限と責任を持って参加する学校運営協議会がある。

「役割がばらばらで、探究活動の手法について助言が得られる大阪教育大学の専門家もいる。学校と産官学の連携が教育活動を支えている構図だ。」

こうした体制が構築できたのは、中高一貫校開設の経緯が密接に関係。府南部の活性化のため、地元から誘致の声が上がったのが背景にある。

大門和喜校長は「子どもたちと大人が、ともに未来の社会をつくる。そんな学校にしたい」と意欲を示している。

ほか、地元だけでなく、広域から参加する団体も含めて「コミュニティ・スクールネットワーク協議会」をつくり、協働活動を推進している。

企業を集めるコーディネーター役がいれば、探究活動の手法について助言が得られる大阪教育大学の専門家もいる。学校と産官学の連携が教育活動を支えている構図だ。